

波

兵庫医療大学薬学部医療薬学科教授

青木 俊二さん③

「海からくすりを探す」というからには、ウエットスーツを着て自身で海に潜る。目的とする生物の採集は、他人任せではほぼ無理。土地のダイバーに写真や採集場所の記録を送っても、期待したものが送られてくることはまれだからである。

カイメンなど我々が研究対象とする

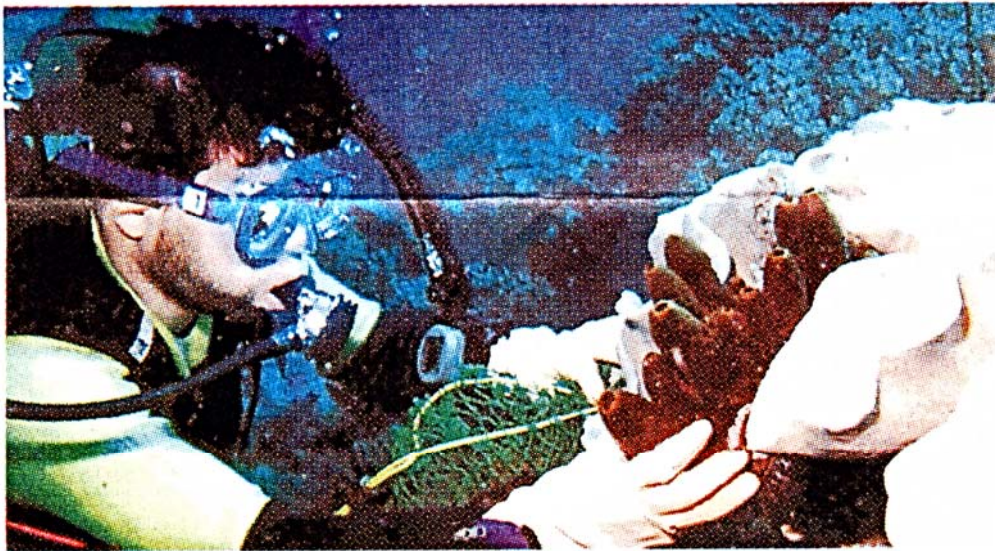
海洋生物採集

る生物は、暖かい海に多く生息している。必然的に採集場所も南の海となる。日本では沖縄近海が多いが、高知の足摺や長崎の五島列島でも採集した。近年は、インドネシアの海に出かけている。

こんな話を知人にすると、「いいねえー、バカンスみたいで」と皮肉交じりに言われることも多い。はっきり言って誤解である。

潜っては戻り…まるで鶺鴒飼いの鶺鴒

我々の赴く現場は、バリ島のリゾートではなく、片田舎なのだ。行程



海洋生物の採集は「肉体労働」―青木教授提供

の途中の集落に休憩で止まったのかと思つたら、そこが目的地だったなんてこともある。

1日の生活パターンもなかなかハードだ。5時起床、すぐにダイビング器材を車に積み込んで港へ出発。6時に出航。ひたすら船を走らせて採集現場に到着。朝8時には1本目のダイビング開始だ。ダイビングといえど格好がよいが、要は「鶺鴒飼いの鶺鴒」だと思つてほしい。サンプルをひたすら採集して船に持ち帰るといふ作業だ。

2本目のダイビングを終えるときに帰港し、遅めの昼食。サンプルの処理、写真とノートの整理が続く。終わればすでに夕刻だから、あとは寝るだけだ。

こんな生活が、休日なしに2週間続いた時もあった。インドネシアに採集に行く時は、頑丈な体に生んでくれた両親に感謝することしきりだ。実験室にこもって試験管とらめっこしているだけが、研究ではないのである。